



## BELLS LETTER 50号 14年間ありがとうございました！

2012年3月。「三日坊主にならないように」

そんな気持ちで始めたベルズレターも、おかげさまで50号を迎えることができました。

これまで長きにわたりお読みいただいた皆さま、本当にありがとうございました！



波乗りリフォーム屋の独り言

Mar 2012 VOL.001 presented by BHD

発行 ベルズホームデザイン

神奈川県藤沢市辻堂西海岸 1-6-3-313

TEL 0466-35-0977 FAX 0466-63-0997

### ご挨拶

もうすぐ春だというのに、まだまだ寒い日が続きますが皆様風邪などひいていませんか？昨年8月にFハウスを退社し、独立開業しまして早半年が過ぎました。業務内容としては何も変わらないのですが、今まで事務さんをお願いしていた発注処理、経理課がやっていた業者さんへの支払いなどなど、すべて互いこなさなければいけません。その分の仕事量は増えましたが、仕事は楽しく毎日充実しています。

さて、今回皆様には定期的にニュースレターを送らせて頂きたいと思います。これは、現在工事中のお客様はもちろん、以前お世話になりましたお客様に少しでも自分のことを知ってもらい、コミュニケーションがとればいいなあという思いから始めるものです。三日坊主にならないよう続けていきたいと思っておりますので宜しくお願い致します。



思い起こせば、大手リフォーム会社を退社し独立開業したのが今から15年前。サラリーマン時代は会社のネームバリューで工事を受注しておりましたが、独立後は「まずは自分のことを知っていただくかなければ」との思いから、このBELLS LETTERを始めました。

当時はまだSNSが今ほど普及しておらず、自宅マンションの一室を事務所として営業していた時代でした。会社の認知度を高め、お客様とのお縁をつないでいくために、試行錯誤しながら発行を続けてまいりました。

その後、現在の茅ヶ崎市平和町へ事務所を移転し、地域密着のリフォーム会社として、多くのお客様から大切なお住まいを任せただけできるようになりました。

振り返りますと、独立当初にBELLS LETTERを始めた目的であった「自分のことを知っていただくこと」「お客様とのお縁をつないでいくこと」は、皆様のおかげで少しずつ形になってきたのではないかと感じております。

創刊から50号という節目を迎えたこともあり、BELLS LETTERは今号を一区切りとし、これからはホームページやInstagramを通して、BELLSらしい暮らしや住まいづくりをお届けしてまいります。

これまでお付き合いいただきました皆さまに、改めて心より感謝申し上げます。

そしてこれからも、株式会社ベルズをどうぞよろしく願いいたします！

## 住まいの中のわずかな距離の話



こんにちは。設計の天内です。今回はお仕事で日々思うことを少しだけ。間取りの打ち合わせをしていると、「動線」という言葉は何度も出てきます。キッチンから洗面へ、玄関から収納へ、リビングから各部屋へ。

線で引けばシンプルに見えるものですが、実際の暮らしの中では、その“わずかな距離”が意外と印象を左右します。そしてこの“わずかな違和感”こそが、人がリノベーションを考え始めるきっかけのひとつなのだ、日々感じています。図面上では数歩の違いでも、日々の中ではその積み重ねが、なんとなくの使いにくさとして残ります。

ただ、それははっきりとした不満として表に出てくることはあまりありません。特に困っているわけではない・・・そう前置きされたあとに少し考えてから出る言葉。設計をしていると、そんな場面によく出会います。

たとえば、買い物から帰ってきたとき。玄関からキッチンまでの間に、小さな段差や曲がりがあるだけで、荷物を持ったままの動きが少しだけ煩わしくなります。ほんの数秒のことですが、それが毎日のことになると、知らないうちに身体が覚えてしまう違和感になります。

あるいは、洗濯の動線。洗う、干す、しまう、その一連の流れの中で、ほんの少し遠回りする配置になっているだけで、家事のリズムが途切れてしまう。「慣れてしまえば気にならない」と言われることもありますが、その“慣れ”の中に、小さな負担が含まれていることも少なくありません。

以前携わった住まいで、図面上は整っているはずの動線に、なぜか少し引っかかる感覚がありました。一つひとつの動きを追っていくと、わずかな遠回りが積み重なっていることに気づきました。人は、こうした小さな違和感を、すぐに“問題”として認識するわけではありません。むしろ長い時間をかけて、「なんとなくしっくりこない」という感覚として蓄積していきます。そしてあるとき、その感覚に言葉が追いついた瞬間に、リノベーションという選択肢が現れてくるのだと思います。動線というのは、短ければ良いという単純なものでもありません。大切なのは、その人の暮らし方に合っているかどうかです。

たとえば、あえて少し距離をとることで、気持ちの切り替えができる場所もあります。玄関からリビングまでの間に、ひと呼吸おける余白があることで、外から内へと気分が整うこともあります。一方で、日常的に繰り返される動きについては、できるだけ自然に流れるように整えてあげたほうが、暮らしは静かに楽になります。

リノベーションの目的では、「動線を良くしたい」という言葉が最初に出てくることはあまり多くありません。けれど、話を丁寧に聞いていくと、その背景には必ずと言っていいほど、“ちょっとした遠さ”への違和感が隠れています。それは数値では測りにくく、図面だけでは見落としやすい部分です。家の中での移動は、毎日繰り返されるものです。その中にあるわずかなストレスが減るだけで、暮らし全体の心地よさは、思っている以上に変わっていきます。

人がリノベーションをしたくなる理由は、決して大きな不満だけではなく、こうした日々の中にある、小さくて曖昧な違和感の積み重ねなのかもしれません。大きく何かを変えなくても、動きの流れが少し整うだけで、空間の感じ方はやわらかく変わる。そんな場面をこれまでも見てきました。図面の線を整えることは、暮らしのリズムを整えることなのかもしれません。日々の中で無意識に繰り返している動きに、そっと目を向ける。動線を考えるというのは、そんな静かな作業だと感じています。だからこそ、実際の暮らしを想像しながら、一つひとつの動きをなぞるように考えていく必要があると、反省しつつこれからも日々精進だと感じています。

## 現場のグルーブを掴むために

新生活、新学期、新入社員、新入生・・・社会という巨大装置に新世代の歯車が組み込まれ、ギンギシと音を立てる爽やかな季節がやってきました。「えっ平成生まれ!？」と珍妙な生き物として扱われた時代も懐かしくなってきました。「えっ令和生まれ!？」と早く言いたいですね。ベルズ塩谷です。

皆さまとのご縁もあり、様々な世代と交わって、お仕事をさせていただき、多くの経験を積ませていただきました。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございます。

ベルズに入社してから、最近特に感じた「現場のグルーブ」について、書いていきたいと思っています。一般的に建設現場では、工程や納期に追われる中で「いかに効率よく進めるか」が常に求められます。私自身も施工管理として、段取りやスピードを意識する場面は多くあります。ただ、その中で感じるのは、現場の出来を左右しているのは単純な速さや効率だけではないということです。

うまくいく現場には、共通して「流れ」「グルーブ」があります。作業のつながりがスムーズで、無理がなく、どこか自然に進んでいく感覚です。この「流れ」は、音楽におけるポリリズムに似ています。例えば3拍子と4拍子のように、異なる拍子が同時に進行しながら、それぞれの周期の中でズレと重なりを繰り返し、やがて再び揃います。その循環の中で、全体としてのまとまりやグルーブが生まれます。

現場でも、大工、塗装、設備、電気など、それぞれが異なる「リズム」と「周期」で動いています。全体がうまく回っているときは、そのズレを無理に揃えるのではなく、互いのタイミングを感じ取りながら、自然と協調しながら次の工程へとつながっていきます。そして、その「協調」は自然に起きているわけではなく、流れを感じ取るための余裕があって初めて成立するものだと感じています。



以前、海の近くの現場で作業をしていたときのことで。その日は天気もよく、景色がとても綺麗でした。大工に「今日は景色がいいですね」と声をかけましたが「余裕あっていいなあ」と返されてしまいました。そこで私は、「余裕があるから景色を見るのではなく、景色を見るから余裕が生まれるのだと思います。」と、自信を持って答えさせていただきました。休憩中とはいえ、一所懸命に作業する現場で、目上の方に対して失礼な物言いであったかとは思いますが、私にとってはとても大切なやり取りでした。このやり取りのあとで感じたのは、景色そのものよりも、「それに気づける状態にあるかどうか」が重要だということでした。どれだけ条件が整っていても、気づけなければ存在していないのと同じだということです。

現場でも同じで、問題の兆しや違和感は常にどこかに現れています。しかし、余裕がなければそれを見落としてしまいます。結果として、それは後からトラブルという形で現れてきます。音楽でいう休符も、それに近いものだと思います。音を鳴らさない時間は「何もしていない」ように見えますが、実際にはリズムを整え、次の音を活かすための重要な要素です。現場における立ち止まりや確認も同じで、一度手を止めることは効率を落とす行為に見えるかもしれませんが、しかし、その一拍があることで周囲の状況に気づきやすくなり、結果として段取りの精度が上がります。

ここまで考えていくと、余裕とは単なる時間の問題ではなく、「何に気づけるか」という認識の問題でもあるように思えてきます。私たちは、認識しているものについては自覚できますが、認識していないものについては、それが何であるか、何を認識していないかを、自分で把握することができません。どこにどんな見落としがあるのか、その全体像をつかむことはできないまま判断しています。

その結果、本来そこにあったはずの違和感や変化、人の状態や現場の歪みといったものが、「見えていないもの」として処理されていきます。認識がなければ見えず、見えていないものは、存在していても存在していないものと同じように扱われてしまいます。

一方で、ほんのわずかな「間」を持つことで、自分の見方そのものを一度外し、別の視点から「全体を捉え直す余裕」を持つことができます。それによって、それまで見ていなかった関係性や変化に気づくことができるようになると思うのです。それぞれが異なるリズムと周期で動く現場において重要なのは、すべてを揃えるのではなく、動きの中にある関係性を捉え、全体の流れを見失わないことなのかもしれません。そのために、時に立ち止まり、自分の外側にある流れに目を向けること。その小さな「休符」の積み重ねが、気づきを生み、段取りを整え、現場全体のグルーブを掴むことへとつながっていくように感じています。

それでは最後に一曲紹介です。

ナイトメアズ・オン・ワックスの不朽の名作

『In A Space Outta Sound』20周年記念企画として、UK ダブの総帥エイドリアン・シャードウッドがリワークした

『In A Space Outta Dub』から「Positive Touch」、ぜひお楽しみください。



## Bells kitchen



海苔パスタ

その後、「ベルズとしてきちんと事務所を構えよう」という思いから茅ヶ崎へ移り住み、憧れだった一軒家での暮らしが始まりました。けれど、子どもたちが成長するにつれて家で過ごす時間は少なくなっていきます。学校、部活動、アルバイト、友人との約束。家は寝に帰る場所のようになり、その代わり靴箱やクローゼットだけは、おしゃれに目覚め、子どもたちの持ち物で溢れんばかりになっていました。そして社会人となり、上の子は家を出ました。今ではひとつの子ども部屋が空いて



バルサミコチキン

います。ガラとした部屋を見ると少し寂しい気持ちになりますが、それもまた成長の証。家族の形が変われば、家の使い方も変わっていくのだと実感しています。私が担当してきた料理の記事も、振り返ると家族の変化そのものでした。子どもたちが小学生だった頃は、家族4人で食卓を囲むことが当たり前でした。成長とともに食べる量はどんどん増え、お弁当づくりが始まり、二人ともスポーツをしていたので補食や遠征用のお弁当づくりにも追われました。今思えば、よくあれだけの量を作っていたものだと思います。冷蔵庫が空になるたびに買い物へ行き、いつもキッチンに立っていたような気がします。けれど、その後はアルバイト先で賄いを食べてきたり、友人と外食をしたりすることが増え、少しずつ家族全員が揃う食卓は減っていきました。そして今では、夫婦二人の食卓がほとんどです。昔のような大皿料理は並ばなくなり、ビールのおつまみが数品あれば十分。食卓の風景もずいぶん変わりました。

暮らしは少しずつ変わり続けます。子どもが成長し、家族の形が変わり、食卓の風景も変わっていく。そんな一つひとつの時間を見守りながら、家は暮らしの舞台であり続けるのだと思います。

14年間にわたりベルズレターをお読みいただき、本当にありがとうございました。



秋鮭の南蛮漬け



豆乳坦々素麺